

生物
I 解答

《生物の多様性と共通性》

1—④ 2—⑥ 3—⑤ 4—② 5—⑥ 6—⑤ 7—④ 8—②

II 解答

《遺伝子とのはたらき》

9—⑤ 10—③ 11—⑥ 12—⑧ 13—⑤ 14—⑦ 15—③ 16—④

III 解答

《動物の恒常性》

17—② 18—⑤ 19—⑥ 20—⑥ 21—④ 22—⑤ 23—⑥ 24—⑤

IV 解答

《体温調節のしくみ》

25—② 26—⑥ 27—② 28—③ 29—⑤ 30—① 31—③ 32—①

V 解答

《生物の多様性と生態系》

33—① 34—④ 35—② 36—③ 37—④ 38—② 39—③ 40—④

国語

一 **出典** 鷗田清一『哲学の使い方』／第二章 哲学の場所〈(岩波新書)〉

解答

問1 A—② B—③ C—⑤ D—① E—④
問2 ②・⑤

問3 ⑤

問4 ①

問5 ①

問6 ④

問7 ④

問8 ④

問9 ②・⑥

【解説】問2 傍線部Aを含む段落の次の段落に「大学という〈知〉の制

度のなかで哲学が占める位置への問い」とあることから、②が答えである。この説明の直後に「〈知〉のトポスのなかで哲学といういとなみが占める位置への問い」とあることから、⑤が答えである。

問3 傍線部イを含む段落に「およそ思考というものは、それが機能不全に陥ったときにみずからの媒体について思考をはじめるのがつねだ」、谷川雁の引用部分に「それはついに詩ではない。詩それ自身ではない。そこには一つの態度の放棄がある」とあることから、⑤が答えである。

問4 「そのこと」とは、傍線部ウの前の「哲学が〈反省〉という形式をもつ『わたしの思考』……じぶんにたいして立てなくなったのではない」を指す。したがって①が答えである。②は「何のために」が不適切。

問5 「哲学というものは、最終的に、……プラクティカルな問いへと収斂するものだ」という考え方を「する人たちにとっては、哲学が「理論のなかの理論」になっているのが「由々しきこと」だ」というのだから、「実践的なアプローチとなるのに」「単なる理論として扱われている」とする①が答えである。⑤は「『理論のなかの理論』を哲学の最終到達点と考え」が不適切。

問6 「外部」とは「メタ」という次元であり、「何かへの問いは、その問いそのものへの問いを自己言及的に含んでいなければならない」のだから、「問題を一つ上の視点や外側から眺め」「自己の立場をも客観的に把握しなければならぬ」とする④が答えである。①②③は「外部」の意味が不適切。③は、傍線部には「哲学の外部をこそもつと意識する」とあるのに対し、「自分に対して立てることを意識し」とする点が不適切。

問7 直後に「哲学の門前で人びとに哲学の学寮に入る資格があるかを厳しく問う監督者」とある。「哲学の学寮」を「研究の場」と言い換えた④が正解。傍線部の前にも、「Philosophierenが大学や学会といった研究機関のなかに制度化されることによって、それじたいとしては非研究者にたいして閉ざされてしまったのではないか」とある。

問8 【文章Ⅰ】は、傍線部を含む段落の最終文にある「純粹＝非実践的な理論の典型として哲学が考えられてきた」ことを問題とした文章であり、【文章Ⅱ】は「カント」の「何をなすべきかを知るのに、学問も哲学も必要ない」という考えを説明したものであることから、④が答えである。

問9 【文章Ⅱ】に「歴史的・文献学的な知識になって」はいけないとあることから②が、それに加えて【文章Ⅰ】の傍線部を含む段落に「学問のなかの学問」としての哲学の話「『もつとも純粹な理論』のモデルになっていることそのことが、すでに哲学にとって由々しきこと」とあることから⑥が答えである。

一 出典 平野啓一郎『本心』（文藝春秋）

解答

問1 A—② B—③ C—④ D—② E—①
問2 ⑤

問3 ②

問4 ④

問5 ④

問6 ⑤

問7 (1)―① (2)―① (3)―② (4)―① (5)―② (6)―①

解説 問2 傍線部Aの直前に「握手を求められたので、応じかけた」とあり、「僕」は反射的に握手に応じたのであり、実際に「僕は彼に触れ、

しかも、その感触はなかった」を感じるまで、中尾がVFであるという認識はなかったと読み取れる。よって、⑤が答えである。

問3 傍線部Iを含む一文の後の中尾の発言に「そんな、幽霊を見るみたいな顔をしないで下さい」とあることから、②の「自身の理解の範疇を超える存在を直視していられなかった」が答えである。①のように「幽霊に違いない」と思い、「足もとの影を確かめ」ようとしたわけではなく、「目を逸らした」ら、そこに「足」の「影」があっただけである。

問4 直前の中尾の様子として「そう説明する彼の目には、憂いの色があつた。しかも彼は、『親として出来るせめてもの孝行』と言うだけでなく、その手前で、『まあ、』と一呼吸置いてみせた」とあり、あたかも自然な感情のある受け答えのように感じられたのに、「話しかければ、非常に自然に受け答えをしてくれます。ただ、心はありません。」という野崎の最初の説明」を思い出し、戸惑っている。したがって④が答えである。

問5 「ただ、現状より、相対的に幸福でさえあるなら」とあり、その「現状」は、リード文にあるように「母が事故で急逝し、寂しさに耐えられなくなった」状態であることから、④が答えである。

問6 傍線部Iを含む段落の次の段落に「『お母さん』という言葉を、母のニセモノに向けて発しようとするのに対し、僕の体は、ほとんど詰難するように抵抗した」とあることから、⑤が答えである。

問7 (3)の「これから『母』になる過程の未完成の存在という意味でも、『母』と示されている」、(5)の「この『僕』の後悔が、『母』という表記に込められているんだよ」、が、適当な説明ではない。